

エステバン・モラーレス
キューバ科学アカデミー会員
「キューバにおける経済学教育の若干の課題」

キューバで、『従来の経済政策についての批判』という本が、3巻で出版されたことがある。イタリアのラ・サピエンサ大学教授、ルチアーノ・バサポーロ教授の本である。この本は、イタリアで出版された『経済実践の研究—資本主義の世界化についての批判的分析』にある基本的な有用な部分を含んでいる本である。このイタリア本には、スペインのホアキン・アリオサ、キューバのエステバン・モラーレス、ウーゴ・ポンス・ドゥワルテ、エフライン・エチェバリアが協力している。

読者を引き付けるこうした性格の本を、キューバにおける経済学教育のために出版する必要性については、明らかに受け入れられたようである。そのことについては、小生が、キューバの雑誌『経済と発展』2001年第2号、164-177ページに、「マルクス主義経済学—第3千年紀の課題—」という題目で、また、イタリアで雑誌『プロテオ』に「経済学批判—歴史的継続性についての課題—」という題目で執筆した。

筆者にとって、この二つの論文、書籍は、キューバの経済学教育が、マルクス主義方法論を基礎の上に、ブルジョワ経済学の成果とマルクスによって創設された経済学を極めて密接に結びつけなければならないという必要性に、解決を与えるものである。古典派経済学と近代経済学のブルジョワ経済学は発展し、その成果を意識的に利用して、資本主義権力のエリートたちに、経済の図面と実践のための有効な道具を与える希望を実現できた。

双方の経済学、ブルジョワ経済学及びマルクス経済学とも、現在、壁にぶつかっているが、それは、次のようにまとめた形で、性格付けることができるであろう。

マルクスによって創設された経済学は、主としてアダム・スミスとデービッド・リカードにより代表される古典派ブルジョワ経済学の批判的再構成に基づき、資本主義の根本的批判を行ったものであり、資本主義社会の歴史的発展のすべての段階について重要な分析として有効である。従って、マルクス主義者と考えることができない人びとは、資本主義についてのマルクスの議論は、克服できないと、今日、引き続き考えているのである。

しかしながら、カール・マルクスは、経済学者たちに、資本主義に取って代わるべき生産様式の建設の理論的・実践的基礎を理論化する重要な課題を残したのである¹。

¹ 少なからずの理論の構築が、いわゆるブルジョワ経済学の主観主義的立場からではあるが、マルクスに関して行われた。しかし、教条的観点に堕したものではなかった。それらは、限界効用論あるいは限界価値論である。これらは、『資本論』第三巻第8, 9, 10章に見いだすことができる。そこで、マルクスは、生産と循環のまとめとして彼の労働価値説を発展させ、平均利潤、市場価値、生産価格についての理論を展開したのである。(筆者注)

ソ連における最初の社会主義経験の有為転変、その後の東ヨーロッパにおける社会主義の崩壊は、社会科学に相談することなく政策を打ち立てる傾向を生みだし、その結果としての主観主義的行動、教条主義、腐敗などとともに、旧社会主義国の内部で経済学分野の科学的創造過程に修復できない害を与えた。

ボルシェビキ革命の勝利の後、ソ連のマルクス主義者の中で、熾烈な論争の試みがあった。それらを思い出すと、工業化論争、そのすぐ後のV.V.ノボシロフ、アガンベギアン、カンタロビッチなどの論争もあった。彼らは、早くも、社会主義的計画過程に経済・数理モデルを導入しようとしたのである。労働費用の測定の過程と投資効率の計算において、いわゆる「逆転関係の費用」という興味深い概念を通じて、限界分析を導入しようというノボシロフの試みは、少なからずの官僚に論争と懐疑をもたらした¹。

ブルジョワ経済学理論で起きたことと異なり、マルクス主義理論は、マルクス経済学が新たな生産様式の建設のために必要な理論を発展させることができるほど、当時、社会主義経済建設において十分に多くの経験をもってはいなかったのである。

資本主義の長い歴史は、その経験から理論的・実践的な生産を達成したが、社会主義は、そうした可能性をもってはいなかった。

したがって、マルクスやレーニンが貢献した資本主義批判は、存続したが、社会主義を機能させるための理論的・実践的な理論の面では、必要な科学的貢献は、初期の発展段階に留まっている。社会主義に貢献した理論もあるが、不十分であり、教条主義の影響を強く受けており、ヨーロッパ、特にソ連における社会主義の崩壊後の現在、それらは、大いに疑問に思われるものとなっている。

一方、ブルジョワ経済学は、1870年頃、リカードの古典主義を放棄し、いわゆる新古典派経済学あるいは限界効用学派という低俗主義に逃げ込んだが、資本主義へのマルクス主義批判を否定する、ブルジョワ生産体制を引き続き機能させるという二つの基本的な課題を抱えていた。

すなわち、マルクス主義経済学が、資本主義批判に集中し、社会主義の建設という理論的・実践的諸問題を後回しにする一方、ブルジョワ経済学は、マルクスの批判を否定することに専念しつつ、資本主義の実践的な運用の諸問題を提起して強力に集中して取り組んだのであった。資本主義の内部で長期の経済的实践を利用するという能力は、大変有利な点であり、その機会をブルジョワ経済学の理論家たちが大変上手に利用することができたのであった。問題は、マルクス主義経済学が資本主義の諸法則の歴史的な側面の批判に、より集中した一方、ブルジョワ経済学の理論家たちは、資本主義の現実の必要性和向かい合い、

¹ Víctor Valentínovich Novozhilov, *La medición de los gastos y sus resultados en una economía socialista*, Editorial Ciencias Sociales. La Habana, 1975.

資本主義システムの諸法則の機能的な側面、資本主義を機能させるにはどうしたらよいかということに最終的に専念したことである。その点では、社会主義建設の失敗において教条主義と、ブルジョワ経済学が社会主義建設に貢献することができる問題についての非科学的批判が少なからず影響を与えた¹。

このように、数理経済モデル（ソロー、ドーフマンなど多数）、国民経済計算（R.ストーン）、通貨理論（ヒックスなど）、国家投資（ケインズ）、労働集約財・生産（レオンチェフ）、国際貿易と国際経済（クルーグマン）、政治経済学（サムエルソン）など、ブルジョワ経済学分野における重要な成果が、大変しばしば知られてはいなかった。以上、それぞれの分野ですでに古典とみなされているものを述べただけである²。

したがって、ブルジョワ経済学によって発展されたこれらすべての理論を習得する必要がある。というのは、思想的な視点からは、ブルジョワ経済学は、決して社会主義建設の過程において受け入れられることはないが、しかし、実際の機能の観点からは、受け入れられると考えるべきではないからである。つまり、マルクス主義的方法論の理論の視点を基礎として、資本主義を機能させるために発達したブルジョワ経済学を、今度は、とりわけ、いわゆる逆転工学の過程を通じて、社会主義建設のための理論の形成にそれを変換するような能力を、ブルジョワ経済学から引き出してほしいものである³。

というのは、マルクス社会科学、特に経済学にたずさわるものにとっては、主要な課題は、マルクス主義の政治的実践の現実と計画についての認識を豊かにする科学はどこにあるかを見つけることができるかどうか、だからである。その答えがどの思想面から生まれるかは、重要ではない。また、エセ科学がどこに逃避するかも重要ではない。すなわち、エセ科学は、単にブルジョワ的搾取を正当化したり、資本主義の矛盾を隠したりする役割をもっているだけなのである。

キューバは、経済の現実によって、社会主義の建設過程に役立つ経験を、すべてのことから学ぶことを義務付けられている。したがって、さらにまた、このことは、世界で最強の帝国主義大国の側からの経済封鎖ともっとも凶暴な侵略政策の中で進められなければならないのである⁴。

¹ このようにソ連の少なからずの本で、ケインズは、馬鹿な人間として、また、レオンチェフ、サムエルソン、ソローなどは、単なる新古典派経済学者で、何の貢献もないとして、紹介されていた。

² 社会科学と数学の関係において、少なからず教条的な態度が取られた。この問題を詳細に理解するには、下記を参照こう。“*Algunos Desafíos de las Ciencias Sociales en Cuba*”, WEB-UNEAC, noviembre del 2010.

³ ブルジョワ経済学の貢献の可能性に対するこうした教条主義的な態度は、マルクス主義社会科学全般に影響している一般的な現象である。キューバにおいて、社会学の場合、70年代、すでにソ連が50年代末に犯していた同じ誤りを犯した。

⁴ この問題の詳細は、筆者の *Un Modelo para el Análisis del Conflicto Cuba-Estados Unidos en los Umbrales del Siglo XXI*, *Revista Política Internacional*, No. 7, enero-julio

したがって、以上に述べたいろいろな著作は、こうした課題を解決するために役立つものであり、それゆえ、キューバのように理論的・実践的、政治的に最も複雑な条件の中でその経済建設の経験に直面している社会主義国で経済学を教えるためには、素晴らしい教材なのである。

(訳 岡 知和)